



小  
秋  
常  
說  
抄



てよえうふはひいどま  
詠奇ふそよりい

和歌童歌抄 全

京都書林 尚古堂梓





てはなまのほむらうばー<sup>はら</sup>さきかふるまの<sup>たが</sup>現しき  
らあはあむーんうれあういふあくそくうのあう

えてのをほほえくうあはいとあかんまの音  
ふ位のうねとたてよこはよこはくよ

喉 あいうえを  
穉 かきくけこ  
齒 さしすせそ  
舌 たちつてと  
あいうえをとまよふ  
られおほえびあまは  
類より出づなりたちつて  
とハ舌あうそせせ音  
なりまみむめとハ唇より  
あうかきくけこハ牙

舌 なにぬねの  
脣 はひふへほ  
脣 まみむめも  
喉 やいゆえよ  
舌 らりるれろ  
喉 わわうゑれ  
しすせそハ齒ハ唇ハ舌ハ  
歯喉のふ音れおハ文字  
乃書ハる也  
又あうそぬなえまらわ  
もはらふハ舌のひき也  
オ一位のよと通りハこれ  
あ乃顔よりがあそあたあ  
なわあうくあのあ  
オ二位のいよと通りハ

オハ位オハ位とこれハ唯一とあうー  
はああハ位オハ位とあうー  
はああハ位オハ位とあうー











と陸舟で野とあはらるるはりてるはよとて  
ふいけりてのりてり

に  
まはるるはりてのりてり  
橋をよこすはりてのりてり

まの舟は水邊のよに今とらるるはり  
次の舟はよこすはりてのりてり

ふあらん今りてのりてり  
大舟のりてのりてり

前の舟はよこすはりてのりてり  
舟はよこすはりてのりてり

花はよこすはりてのりてり  
様はよこすはりてのりてり

まの舟は数ありてのりてり  
波はよこすはりてのりてり

右の外はよこすはりてのりてり  
思ひはよこすはりてのりてり

舟はよこすはりてのりてり  
口はよこすはりてのりてり

出づるにまじらぬもの我意を物になすべし  
世が世とお母ともいふ大首右れ界ともめて  
お母——肝要れ事の結果も世の事いふ  
——世切おありのふらふらひのふらふらひ  
ひらふ所へある世切のふらふらひのふらふらひ  
やばやして見る魚——

このふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
とていふふらふらひのふらふらひ

わがわがとていふふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ

ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ

ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ  
ふらふらひのふらふらひのふらふらひ

るまゝ一へ母にいつかおわりの今もあつと  
なす一へふとて後今思はよかん一とら  
まの今深るなと先一とふとて此極一  
教一障一積一消一なとくはるまゝ一也

○其次の句にきたらる一へ現をその一へと現  
ま一とて事とらるも人あまきけつるおこ  
まをたをま一へ直にまも一へら今一現の  
一へ女を現を一へとてまを一へ白一へはし  
長一短一といふもまをらる一へ母へ現を一

なり候一聖一娘一乃類を一へまはる成  
一へまを現を一へとてまをのり一へとら  
るま一へ成なり遠りしまをらし乃教也  
妻細一へ成なり成て勤毎と一へ

かま首めり事かばはといふ納らんを  
とてせん為也

かまはお込一へるるおがも成なりとあら  
お込一へるるも妻といふも妻成なりとあら  
まをたかといふも直にまを一へとてまを



旗の思種の子にて給妻其命はあやむき  
母 あやむき 母 あやむき 母 あやむき

はれおのこ母もあやむき母もあやむき  
はれおのこ母もあやむき母もあやむき

追加

一 えびおのこ母もあやむき母もあやむき  
あやむき母もあやむき母もあやむき

あやむきの母もあやむき母もあやむき  
あやむきの母もあやむき母もあやむき

一 らんに娘もあやむき母もあやむき

也海 あやむき 折 あやむき 折 あやむき 折 あやむき  
折 あやむき 折 あやむき 折 あやむき 折 あやむき

折に折に折に折に折に折に折に折に折に  
折に折に折に折に折に折に折に折に折に

一 うたひのあやむきの母もあやむき母もあやむき





春のあつと海をうらむ花の散りてあはれ人へ散るる  
あつと海をうらむ花の散りてあはれ人へ散るる

れその中りいふの字もあはれ散るる

とていふと散りてあはれ

まのほろほろ散るるあはれ散るる

ようつとあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るる

あはれ散るるあはれ散るる





月夜也

一 ほど先づれとめては先づ授のになんそいさぬ  
 事へふと先づに法賢師資慶師の師を以  
 制禁としむや一也。願のふらるる白也  
 ともせのふとてこれの事也又此れを  
 まはのたてりよとてこれ禁制めあは  
 ○ てにむとにわく事と児女子はありん  
 そこの事ある詞かく書く

一 ほど先づれとめては先づ授のになんそいさぬ  
 事へふと先づに法賢師資慶師の師を以  
 制禁としむや一也。願のふらるる白也  
 ともせのふとてこれの事也又此れを  
 まはのたてりよとてこれ禁制めあは  
 ○ てにむとにわく事と児女子はありん  
 そこの事ある詞かく書く

一 ほど先づれとめては先づ授のになんそいさぬ  
 事へふと先づに法賢師資慶師の師を以  
 制禁としむや一也。願のふらるる白也  
 ともせのふとてこれの事也又此れを  
 まはのたてりよとてこれ禁制めあは  
 ○ てにむとにわく事と児女子はありん  
 そこの事ある詞かく書く

一 ちきりなまをまされむらにありて誤りあり契絶  
 するは約束に候也契之意といふを契ありん  
 約束して後へ一と申すてあり候意也  
 一 ちきりなまをまされむらにありて誤りあり契絶  
 たるは約束に候也契之意といふを契ありん  
 約束して後へ一と申すてあり候意也  
 一 ちきりなまをまされむらにありて誤りあり契絶  
 たるは約束に候也契之意といふを契ありん  
 約束して後へ一と申すてあり候意也

一 ちきりなまをまされむらにありて誤りあり契絶  
 するは約束に候也契之意といふを契ありん  
 約束して後へ一と申すてあり候意也  
 一 ちきりなまをまされむらにありて誤りあり契絶  
 するは約束に候也契之意といふを契ありん  
 約束して後へ一と申すてあり候意也  
 一 ちきりなまをまされむらにありて誤りあり契絶  
 するは約束に候也契之意といふを契ありん  
 約束して後へ一と申すてあり候意也

糸のうらとんた世風一日子のうらとんた

いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一

ほととぎすの音とまゝにいふこと一 兼ていふこと一  
白鳥の音とまゝにいふこと一 兼ていふこと一  
通とる 氷とる 秋とる 洞とる 妻とる  
右中にいふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
顔とる 地音 羊音 藁とる 虫とる

鳴かす

右中にいふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一

庭 梅 油 虫 土 火 水 和 刺 刺  
の用いふこと一いふこと一いふこと一

たがくこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一  
いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一いふこと一







一 一 一  
あまのこ 遊 櫻 扇

○ 負 生 進

一 一 一  
ら 子 子 子 拂 笑 況 留 悔 控

○ 拾 煩 移 櫻 拵 陰

一 一 一  
一 出 先 相 綴 何 恥 困

○ 暮 執 撫 燈 尋 煩 屯

○ 薄 肩 下 枝 沈 前 賦 靜

水 曼 簪 放 離 箒 蠶

○ 敷 歌 氣 渴 鈴 錫 瓶 鴨 硯

一 一 一  
ら と 念 狐 織 目 山 徳 味 曾 櫻

○ 祀 父 提 機 氏 筋 者 紅 糸

○ 庚 抄 絲 二十年

○ 極 七 函 雅 經 文 禁 光 初

○ 虹 鯨

右 之 和 舟 舟 子 詞 書 子 中 用 け ぬ へ ぎ  
字 山 抄 出 け ね 中 之 矣 者 一 一 乃 之

2000  
由指右

此和歌童觀抄之遺危先生初心此  
門子のもくあり述作ありと予  
宛齊  
あつゝ一覽せしむる縁と求む  
先生へ懇望し開板しし書

東都書林

鬼田屋嘉七

寶曆四  
戊午年五月

